

疾患のchronologyを知ること

馬場 直子

外来診察ではある疾患の一時点をみているだけで、その疾患の過去、現在、未来の姿、すなわちchronologyが容易に想像がつく場合もあれば、むずかしい場合もある。とくに、小児の皮膚疾患ではchronologyを知らないと、間違った対処をしてしまうことが往々にしてある。とりわけ血管腫やアザの診療ではそれがとても多いと感じる。

たとえば乳児血管腫は、出生直後にはなくても生後1~2カ月ごろに急激に増大し、1歳までにはピークに達し、その後退縮期に入り、6~7歳までかけて自然消褪するわけだが、これについて「消えてしまう」とよくいわれているが決してそうではない。瘢痕、皮膚のたるみや皺、血管拡張などが残ることも多い。生後すぐの時点ではわずかな病変なので「何もしなくても消える」「大きくなって本人が気にすれば治療を考えればよい」などといわれて放置されてしまうことがある。しかし1カ月以降に急に増大して、治療介入を要することになる場合もある。やっと紹介してもらえるのはすでに病変が相当大きくなってしまってからであり、ピークに達してから治療介入してもかなりの後遺症を残すこととなる。一方で何もしなくても自然消褪する1歳を過ぎても、延々とβブロッカー内服やレーザー治療を続けている人もいて、これは医療費の無駄であるだけでなく内服治療の場合は低血糖の副作用をきたす恐れも出てきてしまう。

また、異所性蒙古斑で色調が濃いものは、成人になっても残っている人が4%ほどいるが、最近では乳児期早期にレーザーを照射することによって、濃くて露出部位にある異所性蒙古斑が残るのを防ぐ治療が盛んに行われている。露出部位にあり明らかに自然消褪は期待できない濃さであれば、治療効果のよい乳児期早期に治療を開始したほうがよいが「大きくなってから本人が気にしたら治療を考えれば」といわれているケースも多い。一方、自然消褪するようなものまで「乳児期に早く消したほうがいい」と紹介されてくる患者もいる。初診医がレーザー治療を勧めてわざわざ紹介するのではなく「このくらいの濃さならいずれ消えるから大丈夫」と説明できるようになるために、この位の濃さであれば消えるであろう、または残るであろうという異所性蒙古斑のchronologyを知っておくことが大切である。ほかに自然消褪する先天性血管腫(rapidly involuting congenital hemangioma: RICH)や、血管芽細胞腫(tufted angioma)、若年性黄色肉芽腫、肥満細胞腫なども乳児期からあるものは自然消褪するのに、全身麻酔で皮膚生検をされてしまってから紹介されるケースも多い。

われわれが疾患のchronologyを理解しておくことは、現時点で行うべきか、あるいは行わないほうがいいのかを適切に選択し、患者家族の将来に対する不安や悩み相談に答えるためにも非常に重要と思われる。